



Title	ノダの本質的機能に基づく諸形式の統一的分析 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	安田, 崇裕
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12513号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65377
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Takahiro_Yasuda_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 安 田 崇 裕

主査	特任教授	小 野	芳 彦
審査委員	副査 教 授	加 藤	重 広
	副査 教 授	山 田	友 幸

学位論文題名

ノダの本質的機能に基づく諸形式の統一的分析

本論文は、現代日本語の共通語にあるノダ表現の本質的機能を見極めようとしたものである。

ここでノダ表現として一括するのは、話し言葉にも書き言葉にも頻繁に出現する「(する)のだ」「(する)のではない」「(する)のですか」などといった「ノ+コピュラ」という形態の複合辞である。この複合辞「ノダ」は、用言の連体形を受けて文末を形成するほか、一部の接続助詞に接続して従属節をなすこともある。また、発見・説明付け・命令など様々な用法を示すが、ノダが無い場合との差が必ずしもはっきりせず、表面的な観察ではノダがどのような機能を担っているのか特定しにくい。

日本語学の中では、多くの関心を集める現象ではあるが、文法論・意味論・語用論を横断するテーマであり、関連するモダリティ論の研究を広く理解することがまず論考に先んじて必要となるなど、研究課題としてハードルが高いと言える。

肯定・ル形の文末のノダは、「モノダ」「コトダ」といっしょにモダリティーの一類型「説明のモダリティー」をなすという観点で盛んに研究されているが、否定形やタ形、さらには疑問文や文末をなさないものなどは対象外とされることが多かった。また、たといノダ表現一般を取り扱っていても、現象の記述に留まっているものが多い。本質的機能を特定しようとした研究も見られたが、たとえば、著名な先行研究である野田春美1997がスコープ用法とムード用法の2種に分けて論じているように、ノダ表現の広範囲に見られる機能から共通する本質的機能を見出し、それを出発点として多様な用法を説明しようとする研究はほとんどなかった。研究の方法論自体が確立されていないと言えよう。そのような状況下に以下のような成果を得たことは高く評価できる。

この論文で採用した分析方法はつぎの通り。まず、ノダの統語的な階層と文構造に従って、平叙文と疑問文と文末外に分け、平叙文、疑問文については、それぞれのノダの

コンピュータ部分の肯定・否定、ル形・タ形に細分化した8形態について用法を詳述している。ここでは、モダリティーとして働く用法が疑問文にも付随していることを明確に指摘していることと、平叙文と同じように整理することで、ノダ表現の諸用法が体系的なものであることを示したことが成果と言える。

次いで、諸用法がどのような心的プロセスを経て発現するのかを語用論的に検討し、本論文の仮説に至っている。すなわち、ノダは高次表意の標識として機能し、諸用法の機能がそこからの推意によって得られるとするものである。推意がどのような文脈によって制御されるのかを充分説得的に論じており、これまでにない秀逸な論を展開している。

また、この体系を背景に、モダリティーを持つことのできるノダ表現全般に共通する性質・機能を明らかにすることができ、同時に、一部の用法に制限が見られる場合にその形態に原因を求めることが可能になった。さらに、同じ形態で非ノダの文との対照を行うことで、それぞれの形態の用法が持つとされる意味が真にノダの働きなのか、否定やタ形が持つ働きなのかを検証している。

これらのそれぞれが当該分野における成果となっているだけでなく、以上のように完備性を保つ議論を展開していることも高く評価される。

文末外については、接続助詞などに接続する従属節については代表的なものに絞って議論していて、悉皆的な議論にはなっていない。文末形に現れるモダリティー的な用法がどのように残存・消滅・変形するかを示すことが目的であるので、本論文では妥当な方策であろう。惜しむらくは、接続助詞に文法化したとみなすことができる「ノデ」「ノニ」を「独自の変化を遂げている」という理由で検討からはずしたことである。接続助詞と副詞的格助詞の本質的機能差などを解明する糸口となる可能性もあるだけに、多少言及してもいいという意見があった。

文末のノダや認識のモダリティー形式の内側にノダが含まれる現象については、今まで詳しい研究がなかった。形態論的には階層構造をなしているが、意味的には非階層的であるものと入れ子状になるものとがあるとまとめられている。ノダ単独での働きは命題を括りだすこととその命題の判断に対する高次表意を与えることであることを敷衍すると、高次表意が非階層的に与えられるのが基本的構造である。入れ子状になるものは、内側の高次表意が具体的な事象として命題化された解釈に対応する。このように整理された明解な説明をノダの本質的機能の検証として見出したことも大きな成果である。

本論文の欠点を挙げるとすれば、論文の構成である。課程博士論文の場合、研究の経過に沿った記述になることは止むを得ない面があるが、多岐にわたる用法をすべて概観してから、仮説を提示し、再び全ての用法について、その仮説が適用できることを検証するという記法を採用したため、論文の読解に冗長感を感じる面があった。しかし、この記法は、論の完備性を保証する上で大きく貢献しており、瑕疵とするには当たらない。

以上のことを踏まえて、本審査委員会では、申請者安田崇裕氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であると委員全員一致して認めた。